

編集者のことば

一年前の震災予防研究特集（第11号）にあたり、編集者は、災害に対する社会科学界一般の通弊を指摘し、研究の未熟さを歎いた。それが一年間に目立って改善されるということはあるまいか。印象にしかすぎないが、災害問題に対する学者の発言や研究報告で、少ないとは言え耳に入るもののあることが、その一つの理由である。その二つ目の理由が、本特集に含まれた諸研究報告にある。

その多くはいわばハード・ウェア的研究と言ってよからうから、一見すれば社会科学的問題意識から遠ざかるという感がしないでもない。しかし、それら諸研究は、多年蓄積の結果として、人間の主観では動かすことのできない、まさにハードなデータを提供している。それは、人間が主体的に考えかつ行動しようとするときには確実に知って尊重せねばならぬデータである。社会学者が目を向けるのを待っているデータと言えよう。

それらに比べるとソフト・ウェア的な研究も、ここに含まれている。はじめの4篇をそう言ってよいとすれば本号の半数に近い数の報告がこれにあたることになる。これらは、社会学者を招いている研究と言ってよいのではなからうか。ここに、この研究チームの成果の発表が見られ、前記の状況を改善しようとする姿勢が示されていると、編集者は考えたい。

そう考えるのは苦しいこじつけにすぎないと言われるかもしれない。だが、かりにそうだとしても、学問というものは苦しさに直面しこれと闘うことによって打開のいとぐちが開けるものである。少なくとも、そういう闘いの姿をくみとっていただくことはできるだろうと、信じたい。